ユタとふしぎな仲間たち

三浦哲郎

ユタとふしぎな仲間たち

三浦哲郎

913.68 三浦哲郎
ユタとふしぎな仲間たち
新潮社　昭和46年（1971）
216p　20cm（新潮少年文庫2）

著者紹介　昭和6年青森生れ。早大仏文科卒。昭和35年『忍ぶ川』で芥川賞を受賞。清らかな作風で知られユーモラスな筆致にも定評がある。長編秀作『海の道』のほか、『繭子ひとり』は有名。

新潮少年文庫　2

ユタとふしぎな仲間たち

定価　五〇〇円

印刷／昭和46年11月20日
発行／昭和46年11月25日
著者／三浦哲郎
発行者／佐藤亮一
発行所／株式会社新潮社
〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
振替東京八〇八　電話東京二六〇―一一一一
印刷所／大日本印刷株式会社
製本所／新宿加藤製本株式会社

© 1971, Tetsuo Miura, Printed in Japan

乱丁・落丁本はお取りかえいたします。

目次

眠り薬の風が吹く村　5
満月の夜がやってきた　25
暗闇からの訪問者　42
柱のなかのエレベーター　59
ペドロ一家の勢ぞろい　73
秘密とたわむれるぼく　89
雨降りの日の交友録　105
菜の花にまみれるペドロ　121
ぼくの予言と賭けについて　141
夏は鐘の音の輪に乗って　159
秋風に吹かれるペドロ　187
火の粉の河が流れる夜　210

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ユタとふしぎな仲間たち

眠(ねむ)り薬の風が吹く村

いなかの春風のなかには眠り薬がまじっている。

眠い。じつに、眠い。眠くて眠くてたまらない。

きょう、またもやぼくは、授業中に居眠りをして、担任(たんにん)のクルミ先生に叱(しか)られてしまった。きょうは、午前中から、体がむずがゆくなるような、生暖かい春風が吹いていたから、ずいぶん気をつけていたのだけれど、五時間目の算数の時間、黒板に出された問題をさっさと解いてしまって、黒板の横の壁(かべ)のカレンダーが窓から吹きこんでくる風にぱらぱらめくれているのを、机に頬杖(ほおづえ)を突いてぼんやり眺(ながめ)めているうちに、とうとう眠り薬にやられてしまった。

ふつう、眠くなると、まずアクビが先に出てくるものだが、この村の風にまじって

いる眠り薬はよほど強力なものとみえて、アクビは抜きで、いきなりこっくりとくるから困ってしまう。

ぼくはいつものように、竹のムチで頭をこつんとやられて、びっくりして目をさました。

「おはよう、東京のコックリさん」と、クルミ先生はいった。「もう、これで何度目かしら？」

何度目だろう？　残念なことに、ぼくは自分のことながらはっきりと答えることができなかった。これで十二回目だろうか、十三回目だろうか。ともかく十回を越していることは確かなのだが……。

ぼくは、東京から、東北もずっと北の方の山間にあるこの湯ノ花村の分教場に転校してきて、まだやっと一月にしかならない。それなのに、この一月のあいだに十回以上も、授業中に居眠りをしては先生にみつかって叱られているのだから、まったく自分でもどうかしていると思わないわけにはいかない。

「いったい、どうしたんでしょう」

先生はそういって腕組みをしたが、ぼくは黙ってうつむいていた。春風のなかにま

じっている眠り薬のせいで、などといえば、先生もクラスのみんなも、大笑いするにきまっているからだ。

「わかったわ」と、クルミ先生はいった。「ゆうべ、おそくまでテレビを見てたんでしょう」

「いいえ。ちがうんです、ぼく」

「そうかしら？　なんだか、顔にそう書いてあるみたいだけどな。東京の子どもって、すこしテレビを見すぎるんじゃないかしら」

顔にそう書いてあるだって？　と、ぼくはいささかむっとして思った。どうしてクルミ先生は、そんな幼稚園の生徒にいうみたいなことをいうんだろう、六年生のぼくに向かって。

ぼくは、東京の学校から急にこの村の分教場へ転校してきて、いろいろと情けない思いをしていたが、クルミ先生がぼくに話すときだけ、そんな乳くさい言葉づかいをするのも、ぼくには情けないことの一つだった。

いつだってそうなんだ、クルミ先生は。だけど、どうしてなんだろう。ぼくがチビだからだろうか。

なるほどぼくは、六年生にしてはちいさな体をしているかもしれない。それに、痩せっぽちだし、肌色も村の子どもたちに比べればずいぶん白い。その上、村の男の子たちはほとんど坊主頭なのに、ぼくは床屋へいけばバリカンよりもハサミを多く使うような頭をしている。着ているものにしても、自分ではちっとも派手だとは思わないのだが、それでも村の子どもたちにまじっていると、女の子のように目立つらしい。それでクルミ先生は、ぼくをからかって、乳くさい言葉づかいをするのだろうか。

ぼくはいちど、お母さんに、その不満を訴えたことがある。すると、お母さんは笑ってこういった。

「それは、先生はなにもあなたをからかってるんじゃなくて、あなたのことをいたわってくだすってるのよ。あなたが東京からいきなりこんないなかの分教場へ転校してきたんだから。それに、お父さんがあんな事故で亡くなられたんだから」

あんな事故、というのは、ぼくのお父さんが乗っていたマンモス・タンカーが、太平洋のまんなかで、船体が突然真っ二つに折れて沈没するという、とても常識では信じられないような、けれども現実に起こってしまった事故のことだ。

そのために、あとに残されたお母さんとぼくとが、お母さんの実家のあるこの湯ノ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

花村へ引き揚げてきたわけだが、それにしても、ぼくはこれまで、人の同情を買うような態度はいちども取ったことがなかったと思っている。だから、クルミ先生がぼくをからかっているのではなく、いたわってくれているのだとしても、それがかえって、ぼくには少々迷惑なのだ。クルミ先生が、そんなふうにぼくのことをちいさな子ども扱いにするから、村の子どもたちもぼくを一人前に扱ってくれないのだという気さえ、ぼくにはする。村の子どもたちは、ぼくのことを『東京のモヤシっ子』といって、だれも仲間に入れてくれようとはしないのだ。

ぼくは、この村にきてから、いつもひとりぼっちだった。けれども、だからといって、ぼくは毎日テレビばかり見ていたのではない。第一、ぼくがいま住んでいるお母さんの実家には、テレビなんかないのだ。お母さんの実家は農家だから、おばあちゃんも、伯父さんも伯母さんも、家族はみんな早寝早起きだ。もちろん、ぼくも、東京にいるころはそうでもなかったけれど、この村へきてからはすっかり早寝早起きのくせがついてしまった。だから、ちっとも寝不足なんかではないのだが、それでも一日中、絶えず眠気に襲われるのだから、へんなのだ。

いなかの春風のなかには眠り薬がまじっている——そう思うほかはない。

眠い。じつに、眠い。眠くて眠くてたまらない。

この湯ノ花村は、その名のとおり湯の花のにおう村である。湯の花というのは、温泉のなかにできる沈澱物のことだが、においとしてはそんなにいいにおいとはいえない。ちょっとアンモニアに似たにおいだ。それが、どこへいっても空気のなかにかすかにおっている村なのである。

いまはもう、馴れてしまって、なんともないが、初めはこんないやなにおいのする村で暮らすのかと思って、うんざりしたものだ。

うんざりしたといえば、初めて村の分教場をみたときも、これから毎日こんなところへ通うのかと、正直いって、うんざりした。なんてちっぽけな学校だろう！　この分教場には、教室が三つしかなくて、それでいて小学校と、中学校を兼ねているのである。一つの教室には、小学校の低学年が、一つの教室には、小学校の高学年が、もう一つの教室には中学生がはいっていて、先生は高野マモル・クルミという夫婦の先生がいるきりである。マモル先生は中学校を、クルミ先生は小学校の二教室をかけもちで教えている。

ぼくたち小学校高学年のクラスは、生徒の数が全員合わせても二十人に一人足りなかった。ぼくたち六年生は、たった六人しかいなくて、教室の外に面した窓ぎわに机を六つ、縦に一列に並べている。ぼくは転校生だから、一番うしろの机が与えられた。ところが、隣の机には五年生の小夜子という女の生徒がいて、この小夜子はほとんど毎日のように、まだ赤ん坊の弟をおんぶして学校へ出てくる。

困るのは、この赤ん坊がときどき大きな声で泣きだしたり、ぐずぐずとむずかったりすることよりも、蒸れたオムツのにおいが鼻先に漂ってくることであった。それで、ぼくはたいていの日は窓を開けておくのだが、そうするとそこから風が容易にはいってきて、だからぼくは絶えず眠り薬にやられる危険にさらされているというわけだ。

その眠り薬のきき目に一役買っているのが、この分教場の授業の退屈さだと、ぼくはひそかにそう思っているのだが、東京の学校に比べると勉強はだいぶおくれているのに、この分教場では、教える先生も、おそわる生徒たちも、たいそうのんびりしているのだ。ぼくは、自慢をするわけではないけれど、東京の学校にいるころは、体育さえのぞけば常にクラスのトップを争っていた。競争相手が何人もいたから、勉強をするのにも張り合いがあった。ところが、この分教場へきてみると、競争相手なんか

一人もいないばかりか、ぼくはなにかの手違いで一年か二年下の学年に入れられたんじゃないかという気さえしたものだ。

ぼくは、すっかり気が抜けてしまって、ろくに勉強もしなくなった。予習なんかしてこなくても、先生が黒板に出す問題ぐらい、簡単に解くことができる。居眠りからさめた直後でも、国語の本ぐらいすらすら読める。それで、ぼくは授業時間の大半を、ぼんやり東京のことを思い出したりしながら過ごすのだが、困ったことに、そんな状態でいるときが最も眠り薬がききやすいのだ。つい、こっくりが出て、先生に叱られることになってしまう。

村に湧いている温泉は、ラジウムを含んだ鉱泉で、温泉宿が三軒ある。その三軒のうちでいちばん大きな銀林荘は、ぼくのお母さんの実家とは親戚同士で、お母さんはいま、かよいでその銀林荘の帳場を手伝っている。ぼくは、分教場から帰ってきても、だれも遊び相手がいないから、縁側に学校道具を置くとそのまま銀林荘へいって、寅吉じいさんの薪割りを見物するくせがついていた。

寅吉じいさんは、もうずいぶん昔から銀林荘に雇われている老人で、そろそろ腰が曲がりかけているのに、まだまだ薪を見事に割る腕は衰えを見せない。薪小屋のなか

の、木の切り株の台に薪を立てて置いて、柄の長いマサカリを振り上げ、振りおろすと、薪はさくりと割れて、切り株の両側に落ちる。

温泉といっても、湧いている鉱泉は温度が低いから、風呂は沸かさなければはいれない。その風呂を沸かすための薪を割るのが、寅吉じいさんの仕事なのだ。だから、寅吉じいさんはたいてい薪小屋にいるが、薪小屋にいないときは谷間の浴場の焚き口の前で、キセルで一服つけながら火の番をしている。その焚き口にもいないときは、谷川のほとりに傾いている朽ちかけた水車小屋のかげで、昼寝をしている。

ぼくは、寅吉じいさんを捜して水車小屋のかげまでいって、そこの草の上に寝そべって昼寝をしているじいさんと並んで、眠ってしまうこともあった。薪小屋で、まだ割らない薪に腰をおろして見物しているうちに、だんだん瞼が重たくなってきて、いつのまにか眠ってしまうこともあった。

ある日、寅吉じいさんは、ちょうどそんな居眠りからさめたばかりのぼくの顔を、呆れたように眺めて、こういったことがある。

「寝る子は育つと昔からいうが、坊は、ちと、眠りすぎじゃのう」

眠る子は育つはずなのに、ぼくがいつまでもチビなのは眠りすぎるせいなのだと、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com